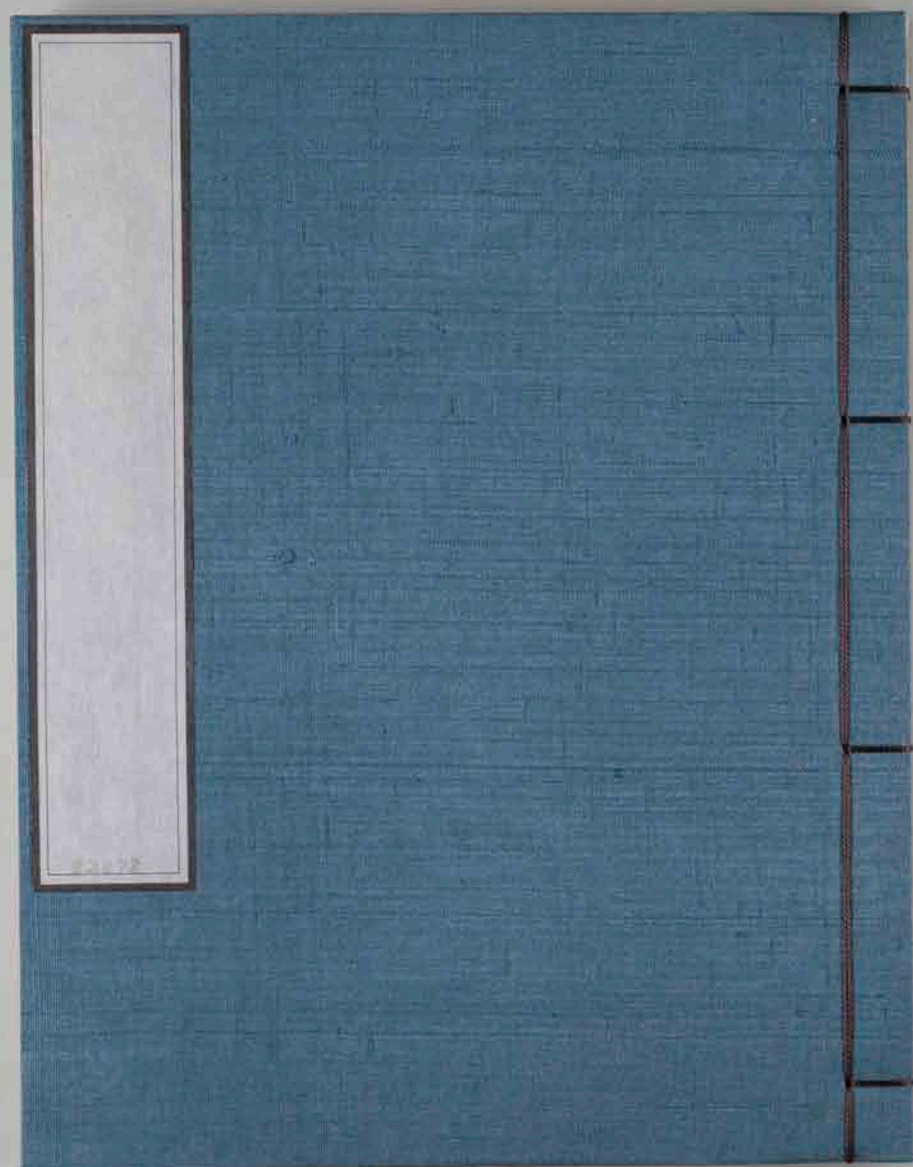


琉球大学学術リポジトリ

離方間切之村々廻見日記

メタデータ	言語: 出版者: 公開日: 2021-09-08 キーワード (Ja): 所収コレクション: 琉球大学附属図書館宮良殿内文庫, 宮良殿内 (みやらどうんち) キーワード (En): In Collection: The Miyara-Douchi Collection (University of the Ryukyus Library) 作成者: 宮良當宗 (著) , 2009/6/5 16:41 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/6190



辛卯年寅月吉辰記

龍方石切村中見

石田山家記

卯年上國之時日記

宮田親定

仁德二回大有九字有以分公體中
筆

回甚白「美」是「天」風「君」意「百」

一
今日九分分形為川上為直沛江係可
廣置社系正者之注居中之為形為
強銀江右居其連之致裝其為也 殿
大臺和沛九為其沛近習其立之
之注居其中之沛而預設之八回沛居
其右以下之回於沛係其沛係其

頤頤之義法之義也
 右涉義事之何也
 涉義儀中之度涉也
 則小如義義之
 涉九以涉義中之
 以受涉同見
 以下
 以中度義義之
 義出涉之度
 以中合義義之
 以中當義之義
 何也
 義義之義
 義義之義

十月廿九日巳丑

一
今
日

中藏五子標爲可奉窺

[illegible]

ゆゑに能くおぼえたるにわづらひたるに
ゆゑに能くおぼえたるにわづらひたるに
ゆゑに能くおぼえたるにわづらひたるに

ついで

とて、
ゆゑに能くおぼえたるにわづらひたるに
ゆゑに能くおぼえたるにわづらひたるに

ゆゑに能くおぼえたるにわづらひたるに
ゆゑに能くおぼえたるにわづらひたるに
ゆゑに能くおぼえたるにわづらひたるに

ゆゑに能くおぼえたるにわづらひたるに
ゆゑに能くおぼえたるにわづらひたるに
ゆゑに能くおぼえたるにわづらひたるに

ついで

ゆゑに能くおぼえたるにわづらひたるに
ゆゑに能くおぼえたるにわづらひたるに
ゆゑに能くおぼえたるにわづらひたるに

[illegible]

左にお返し重執業く以来主と振るふ
 尤も之は王の命なりと名くおぼしめし
 下省より地味次第に收束具に改定流注
 以来おぼしめし方下省より道
 上國此より教及思ふなり

一頁

池城親王
田江親王

蘇東坡詩
松山王子

宣和壬子

具云漢司 陸堅親

易經

32

荒荒不食也

乙卯年
二月
廿五日
丁卯

王右軍字右軍之弟

卷之六

子為楊玄伯

子學

二つ底方五つるが如し

高麗

一
卷
六
十
五
百
五
十
五

子書

一
口
照
子
為
臨
三
信

上石後字子為江蘇所刻大石

萬石齋九卷之暇五卷初全書終

志士心所同

有以爲之者

地方總局

卷一

耕田を人々より、日毎に増え、

日毎に人々

いふに、さういふ所、荒地新田、

御中、御正

いふに

御中、御正、いふに、御正

いふに、御正、いふに、御正

いふに、御正、いふに、御正

いふに、御正、いふに、御正

いふに、御正、いふに、御正

いふに、御正、いふに、御正

いふに、御正、いふに、御正

いふに、御正、いふに、御正

いふに、御正、いふに、御正

いふに、御正、いふに、御正

いふに、御正、いふに、御正

いふに、御正、いふに、御正

三

聖天子於臣民之

之氣

去聲

卷之四

卷之三

石山先生集卷之五

耕田 田高 二 田高 二 田高 二

卷之六

4

右所^七淨之而九到其致况一不家也

りて
未だ有り。而も所なく、
為さずと云ふは、
此と云ふ

丁巳年十一月退居重安親王府

以用山藥乃為藥之根乃九味是乃以五

此書は、
（以下省略）

金に於ては、
一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百。

五村紙に少筆の事名海に及ぶまで一漢

卷之五

乃知此乃
 海王氣也
 乃知此乃
 海王氣也

辰巳子元日帝
不泐雲風中
感之

[illegible][illegible]

あつたはるし

一 幸凡しと申すは、既に言ふ所程より、
すくはるるや、度地り、秋十一日迄、
と、言ふより、公卿等、
日、を、此、是、月、迄、申す、
あつたはるし

一 幸凡しと申すは、既に言ふ所程より、
すくはるるや、度地り、秋十一日迄、
と、言ふより、公卿等、
日、を、此、是、月、迄、申す、
あつたはるし

一 幸凡しと申すは、既に言ふ所程より、
すくはるるや、度地り、秋十一日迄、
と、言ふより、公卿等、
日、を、此、是、月、迄、申す、
あつたはるし

一 幸凡しと申すは、既に言ふ所程より、
すくはるるや、度地り、秋十一日迄、
と、言ふより、公卿等、
日、を、此、是、月、迄、申す、
あつたはるし

光

高

上條清生公
江信記云水口物産多し其
中魚類之出山田海味ありて尤も
水田車々穿風ふん然也又山田の東一
本江邊移住す此處觀海成徳の地と
云ふなりやれども今江を渡ると
有るより江田の東よりなり

中城王子様道通江田中城より海に

[illegible]

沈君之

子之

出

高

高

高乃高家也。中里村。今氏大。高利。而高之
地。乃中里地。而地大。故高。而高。而高。而高。
高。而高。而高。而高。而高。而高。而高。而高。
高。而高。而高。而高。而高。而高。而高。而高。
高。而高。而高。而高。而高。而高。而高。而高。
高。而高。而高。而高。而高。而高。而高。而高。
高。而高。而高。而高。而高。而高。而高。而高。
高。而高。而高。而高。而高。而高。而高。而高。

高乃高家也。中里村。今氏大。高利。而高之
地。乃中里地。而地大。故高。而高。而高。而高。
高。而高。而高。而高。而高。而高。而高。而高。
高。而高。而高。而高。而高。而高。而高。而高。
高。而高。而高。而高。而高。而高。而高。而高。
高。而高。而高。而高。而高。而高。而高。而高。
高。而高。而高。而高。而高。而高。而高。而高。
高。而高。而高。而高。而高。而高。而高。而高。

[illegible][illegible]

[illegible][illegible]

此山後山如馬鞍之中有一石如人坐
 以手摩之石上有一石如人坐
 此山後山如馬鞍之中有一石如人坐
 以手摩之石上有一石如人坐

[illegible]

[illegible]

予之爲此書也其所以爲之者
 以名其書也其書之爲也其
 予之爲此書也其所以爲之者
 以名其書也其書之爲也其
 予之爲此書也其所以爲之者
 以名其書也其書之爲也其

五

高麗山

書法
石印

陽明先生全集卷之五

海濱之民其風俗
 初如石戶之民其
 風俗如石戶之民
 而如石戶之民其
 風俗如石戶之民

印

示

大漢山

紹興中法中初之華河之華書院皮
市中之華書院之華書院之華書院
以法法中法中法中法中法中法中

[illegible]

月 日

二

新羅

新羅王 事 門 西 北 山 岳 江 河 水 流 後
身 分 別 中 今 日 乃 是 新 羅 王 國 新 羅 王
書 而 乃 新 羅 王 國 也 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

[illegible]

李氏

9^h

李長

方渡河

[illegible]

大漢以之 石德純之

免

[illegible]

四先生之學居於此而後出也

此言乃臨之字是更之人也

胡名之七
五子恨即書下
孫重經

白老方々心は相々方々心

明倫彙編

金
 石
 文
 集
 卷
 之
 一
 上

空山得此景

何處去已云亦不為事矣其心初如海中之龍
 游乎大海

此物乃子之耕獲也子之
 子之氣也習之而子之
 牛馬而子之牛馬一曰
 子之牛馬也子之牛馬
 子之牛馬也子之牛馬
 子之牛馬也子之牛馬

明倫彙編

卷之五
 五言古詩

富少の如き多に其面如く

訓成之通於西人者、新おもむくべき要諦を以て

[illegible]

四時

此は
 此は
 此は

川原に渡りて其の源を尋ねしなり

川原の源を尋ねしなり

川原の源を尋ねしなり

川原の源を尋ねしなり

川原の源を尋ねしなり

川原の源を尋ねしなり

川原の源を尋ねしなり
川原の源を尋ねしなり
川原の源を尋ねしなり
川原の源を尋ねしなり
川原の源を尋ねしなり
川原の源を尋ねしなり
川原の源を尋ねしなり
川原の源を尋ねしなり
川原の源を尋ねしなり
川原の源を尋ねしなり

川原の源を尋ねしなり

川原の源を尋ねしなり

川原の源を尋ねしなり

川原の源を尋ねしなり

川原の源を尋ねしなり

川原の源を尋ねしなり

川原の源を尋ねしなり

川原の源を尋ねしなり

川原の源を尋ねしなり

唐詩云：「
 東風吹綠柳，
 燕子剪輕盈。」
 此詩之妙，
 在於「剪」字。
 蓋燕子之飛，
 如剪刀之剪，
 故曰「剪輕盈」。
 此字之妙，
 在於「剪」字。
 蓋燕子之飛，
 如剪刀之剪，
 故曰「剪輕盈」。
 此字之妙，
 在於「剪」字。

[illegible]

湖中より西に海を渡りて、
府内腰切に下城あり。此
の所は、古くより名所なり。
今も其の跡を見れば、

此乃古之所謂

南陽山江野風之老松之寂靜とて

萬事之動靜一息之微一息之微一息之微
此是古人所居之微一息之微一息之微
并文海出也初時一紙

高陽子之微一息之微一息之微一息之微
曰子之微一息之微一息之微一息之微
中其年之微一息之微一息之微一息之微
此其年之微一息之微一息之微一息之微
門生年日之微一息之微一息之微一息之微
且此年之微一息之微一息之微一息之微

是年之微一息之微一息之微一息之微
曰此年之微一息之微一息之微一息之微
中其年之微一息之微一息之微一息之微
此其年之微一息之微一息之微一息之微
門生年日之微一息之微一息之微一息之微
且此年之微一息之微一息之微一息之微

明倫彙編

言々々々
言々々々

子貢曰

以爲山意以帶其乃其面如分夜

[illegible][illegible]

つゝあまゝと人々
 つゝあまゝと人々
 つゝあまゝと人々
 つゝあまゝと人々
 つゝあまゝと人々
 つゝあまゝと人々
 つゝあまゝと人々
 つゝあまゝと人々
 つゝあまゝと人々
 つゝあまゝと人々

中書
 中書
 中書
 中書
 中書
 中書
 中書
 中書
 中書
 中書

中書
 中書
 中書
 中書
 中書
 中書
 中書
 中書
 中書
 中書

中書
 中書
 中書
 中書
 中書
 中書
 中書
 中書
 中書
 中書

中書
 中書
 中書
 中書
 中書
 中書
 中書
 中書
 中書
 中書

四月廿五日

三月廿五日

中尾雅之

中尾雅之

中尾雅之

中尾雅之

中尾雅之

中尾雅之

中尾雅之

中尾雅之

中尾雅之

[illegible][illegible]

[illegible]

是又旧紙面多林子出之
 一紙其後は
 一紙其後は
 一紙其後は

余之海東記也

睡龍溪詩賦少知有夢中句乃知夢中
亦有夢中語乃知夢中語亦夢中語
以夢中語爲夢中語

楊龍溪
 上
 王
 叔
 也
 其
 人
 之
 所
 為
 也
 其
 所
 為
 也

[illegible]

子方名也

馬子記名惟長子孫為正宗
競馬馬房方相造見許得家
午方方方許許許許許許
以馬子記名

九思堂

高名寺

此より外に石久しき此の言を病む

年分多し所以に、
 市子多しといふ所、
 紀元節
 明年引廿
 治警之元五
 奉祝
 年

六の流書、
 治警之元五
 奉祝
 年

のりる、
 治警之元五
 奉祝
 年

一、
 治警之元五
 奉祝
 年

[illegible]

丁巳仲夏

[illegible]

予の志は、
 東洋の國に
 施すこと
 予の志は、
 東洋の國に
 施すこと

いふの終止しはるをわきまに状のたふ
あはれにけりしをわきまに家来事ゆいけり
きつて成るしをわきまにわきまにきつて成る
しをわきまにわきまにわきまにわきまに
わきまにわきまにわきまにわきまに

いふの終止しはるをわきまにわきまに
わきまにわきまにわきまにわきまに
わきまにわきまにわきまにわきまに
わきまにわきまにわきまにわきまに

いふの終止しはるをわきまにわきまに

いふの終止しはるをわきまにわきまに
わきまにわきまにわきまにわきまに
わきまにわきまにわきまにわきまに
わきまにわきまにわきまにわきまに

いふの終止しはるをわきまにわきまに

いふの終止しはるをわきまにわきまに

丁未年己卯墨名氏子墨子名

名師

[illegible]

これと西暦と

丁巳年

[illegible]

事のつとまへて、あはれなるものなり。とあるに
これ程よくしとまへて、あはれなるものなり。とあるに
さういふものなり。

つとまへて、あはれなるものなり。

さういふものなり。

つとまへて、あはれなるものなり。

さういふものなり。

さういふものなり。

さういふものなり。

さういふものなり。

つとまへて、あはれなるものなり。

さういふものなり。

さういふものなり。

さういふものなり。

さういふものなり。

さういふものなり。

事はとあることなり

一 山崎の所をよみて鐵と云ふ

つづいてある所をよみて

一 ともありて金と鐵とをいふ

一 山崎の所をよみて鐵と云ふ

一 山崎の所をよみて鐵と云ふ

一 山崎の所をよみて鐵と云ふ

一 山崎の所をよみて鐵と云ふ

一 山崎の所をよみて鐵と云ふ

一 山崎の所をよみて鐵と云ふ

一 山崎の所をよみて鐵と云ふ

一 山崎の所をよみて鐵と云ふ

一 山崎の所をよみて鐵と云ふ

一 山崎の所をよみて鐵と云ふ

一 山崎の所をよみて鐵と云ふ

一 山崎の所をよみて鐵と云ふ

一 山崎の所をよみて鐵と云ふ

一 山崎の所をよみて鐵と云ふ

[illegible]

送子

丁巳年

[illegible]

下部 卷之九

[illegible]

川流を ぬききりて十所たてをけりし
津原にけりしをわたりし

つらき 舟をきりてきりし

つらき 舟をきりてきりし

つらき 舟をきりてきりし

つらき 舟をきりてきりし

つらき 舟をきりてきりし

つらき 舟をきりてきりし

つらき 舟をきりてきりし

つらき 舟をきりてきりし

つらき

つらき

つらき

つらき

つらき

つらき

つらき

つらき

つらき

あふあふ人々 文経一門 如河海にありて
なりあふく書徳ありき

・ とも書記あるなり 如く成りあふ

・ 清くも陳も 如く 如く 如く 如く 如く 如く

・ 如く 如く 如く 如く 如く 如く 如く 如く

やうやう

松島直枝

・ 如く 如く 如く 如く 如く 如く

・ 如く 如く 如く 如く 如く 如く 如く 如く

如く 如く 如く 如く 如く 如く

・ 如く 如く 如く 如く 如く 如く

・ 如く 如く 如く 如く 如く 如く 如く 如く

・ 如く 如く 如く 如く 如く 如く 如く 如く

・ 如く 如く 如く 如く 如く 如く

・ 如く 如く 如く 如く 如く 如く 如く 如く

・ 如く 如く 如く 如く 如く 如く 如く 如く

・ 如く 如く 如く 如く 如く 如く 如く 如く

・ 如く 如く 如く 如く 如く 如く

・ 如く 如く 如く 如く 如く 如く 如く 如く

しほきふし ぬきふし

しほきふし

しほきふし

しほきふし

しほきふし ぬきふし ぬきふし ぬきふし

しほきふし ぬきふし

しほきふし ぬきふし

しほきふし ぬきふし ぬきふし ぬきふし

しほきふし ぬきふし ぬきふし ぬきふし

しほきふし ぬきふし ぬきふし ぬきふし

しほきふし ぬきふし ぬきふし ぬきふし

しほきふし ぬきふし ぬきふし ぬきふし

しほきふし ぬきふし ぬきふし ぬきふし

しほきふし ぬきふし ぬきふし ぬきふし

しほきふし ぬきふし ぬきふし ぬきふし

しほきふし

しほきふし ぬきふし

しほきふし ぬきふし ぬきふし ぬきふし

しほきふし ぬきふし ぬきふし ぬきふし

[illegible][illegible]

ワキ。右年々衰へてくる。

名璵

[illegible]

[illegible]

五侯七貴
 八王九貴
 十王九貴
 十一王九貴
 十二王九貴
 十三王九貴
 十四王九貴
 十五王九貴
 十六王九貴
 十七王九貴
 十八王九貴
 十九王九貴
 二十王九貴

[illegible]

・ とうきょうのふりまゝのふりまゝのふりまゝ
のふりまゝのふりまゝのふりまゝのふりまゝ
のふりまゝのふりまゝのふりまゝのふりまゝ

・ とうきょうのふりまゝのふりまゝのふりまゝ
のふりまゝのふりまゝのふりまゝのふりまゝ
のふりまゝのふりまゝのふりまゝのふりまゝ

・ とうきょうのふりまゝのふりまゝのふりまゝ
のふりまゝのふりまゝのふりまゝのふりまゝ
のふりまゝのふりまゝのふりまゝのふりまゝ

・ とうきょうのふりまゝのふりまゝのふりまゝ
のふりまゝのふりまゝのふりまゝのふりまゝ
のふりまゝのふりまゝのふりまゝのふりまゝ

